

地域の歴史と文化を刻む

やんばるの森

関西支所 森林資源管理研究グループ長 齋藤和彦

2016年9月15日、沖縄県に「やんばる国立公園」が誕生しました。やんばるの森は、ヤンバルクイナをはじめ希少な固有種が多数生息する生物多様性のホットスポットです。原生林とされている人も多いようですが、今も林業が行われており、また、森の中に入ってみると、畑の石積みや炭窯、藍壺の跡、古い歩道にも出くわします。この森は、人々の暮らしとともに今日に至った森なのです。

「やんばる（山原）」は、元々、現在の沖縄県北部地域を指す俗称で、その名が示す通り山がちな地域です。琉球王国の時代にはこの山々から、首里城の修築や中国との貿易船建造に使う大木が伐り出されました。その後、大木が減少したため、王府は、大部分の森林を「杣山」として囲い、有用樹を禁伐にしました。そして、その木々を当時の村、現在の字に守り育てさせました。国頭村字奥間の伝統芸能「クンジャンサバクイ」は、杣山で育った大木を伐り出した当時の様子を今に伝えています（写真1）。

しかし、明治に入ると廃藩置県で王府がなくなり森林は荒れました。特に地租改正で税が金納になった影響は大きく、他に換金の品がないため、大木も含めてみな薪にされました。また、藍染め用の山藍も高く売れたため、廃藩置県で困窮した士族や農民が山藍を育てるために奥山を開墾

写真1 クンジャンサバクイ



しました。現在も山中に点在する開墾の石積み（写真2）や、山藍を発酵させた藍壺の跡（写真3）は、この当時のものなのです。

こうして森林が荒れたことに対し、沖縄県は、明治の終わり頃から、一定面積を毎年順番に皆伐し、森を仕立て直す「施業案（せぎょうあん）」の普及に努めました。今、山に残る炭窯（写真4）は、皆伐で出る曲材や多節材の有効利用のために、この頃、本土から導入された技術でした。

しかし、こうして仕立て直された森は、その後の沖縄戦と戦後復興期の乱伐で1960年頃までになくなり、多くの人は林業から離れました。一方、林業に残った人は、1960年代半ば頃から、米軍払い下げのブルドーザーやトラックを導入し、奥地に残された天然林の伐採へと進みました。ここ数年、国頭村の与那覇岳（よなはだけ）で開かれているトレイルラン大会で使用されているコースは、この時代に切り開かれたブル道（写真5）なのです。

やんばるの森に残る人々の営みの痕跡は、そのほとんどが既に苔むして、地域の歴史資源になっています。やんばるの森は、日本の次なる世界自然遺産候補になっていますが、貴重な自然というだけでなく、山とともにあった地域の歴史や文化を刻む森なのです。



写真3 藍壺跡



写真2 開墾の石積み



写真5 ブル道



写真4 炭窯跡